

19世紀フランス商人の西アフリカ進出とセネガル社会(1) : 19世紀前半のサンルイを中心に | French Merchants and Senegal Society in the 19th Century [1]

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/17668">http://hdl.handle.net/2297/17668</a>

# 19世紀フランス商人の西アフリカ進出と セネガル社会〔1〕

— 19世紀前半のサンルイを中心に —

正 木 響

## 目 次

- 0. はじめに
  - 1. セネガル川周辺地域の概略
    - 1・1 フランス商館の設立
    - 1・2 サンルイ
    - 1・3 セネガル川周辺の交易の拠点
    - 1・4 北アフリカとの関係
  - 2. 19世紀初頭のサンルイとその周辺社会
    - 2・1 19世紀、フランスのセネガル進出
    - 2・2 モール人
    - 2・3 セネガル川南部の王国
    - 2・4 *Habitant, Négociant* そして *Traitant*
    - 2・5 *Habitant* の自治: *Maire*
  - 3. 19世紀前半の換金作物
    - 3・1 アラビアゴム
    - 3・2 アラビアゴムとインド綿の交易
- (続)

## 0. はじめに

アフリカの経済問題が、毎年、先進国首脳会議の主要議題の一つに掲げられるようになって久しい。特に、多くのアフリカ諸国が独立した1960年代の初め、天然資源に恵まれているアフリカの一人当たりGNPは、東アジアのそれよりも全般的に高かったにもかかわらず、その後約半世紀の間に、両者の立場が逆転したことは周知のとおりである。この半世紀に渡る両地域の経済格差の広がりから、東アジアの経験をアフリカの経済開発に活かそうとい

う声も無いわけではない。しかしながら、南アフリカ共和国や北アフリカ諸国を除いたサブサハラアフリカの大半の国においては、人口が稀少で、製造業の基盤が脆弱であることから、アジアと類似の経済開発政策をとることによって経済成長を期待できるほど単純ではないことも自明である。

現在のアフリカ問題を考察する際に、今のような経済構造を持つにいたった原因の一端を、旧フランス領西アフリカを中心に社会経済史の視点で検証することが本研究の目的である。アフリカの歴史研究としては、本邦においても、奴隷貿易や植民地化以降を対象とした研究が既にいくつかなされている。しかしながら、奴隷貿易が斜陽になった19世紀初頭から、アフリカ大陸分割の方法が議論されたベルリン会議（1884-85年）までの期間については、植民地化に至る歴史的過程を知る上で重要であるにもかかわらず、十分に検証されていないようである。アフリカに進出したヨーロッパ商社と帝国主義研究の一人者である A.G.Hopkins 自身も、19世紀末のアフリカ分割に関する議論に比べて、19世紀半ばから大恐慌が始まる1930年代までの期間にヨーロッパ諸企業がアフリカでの活動領域を決定していく過程の研究が不十分であることを1976年の時点で指摘しているが<sup>1</sup>、それから四半世紀以上たった現在においても、その状況は大きく変わっていないようである<sup>2</sup>。彼は、後者を「非公式な帝国主義——"Unofficial" mind of imperialism」と呼んでいるが、本研究では、19世紀前半からベルリン会議までのアフリカ分割前夜の期間をとりあげ、その間におけるフランス本国の揺らぎと、それに呼応してフランス商業界がアフリカ進出に関心を持ち始める過程を数回に分けて明らかにする予定である。実際、奴隷貿易が廃止された1814年のパリ条約からベルリン会議までの期間は、まさに、この地域を支配下に置いたフランス自身が封建制度から脱却し、市民を主体とした近代的な社会構築をめざして揺れ動く胎動の時代に一致する。この1814年から1884年までの期間を、二月革命が発生した1848年までの復古王政の時代、1848年から1870年までのルイ・ナポレオンの時代、そしてそれ以後の第三共和制の時代の三つに分けるならば、復古王政の下では、外部に対してどちらかといえば閉鎖的な政策がとられたのに対して、ルイ・ナポレオンが政権を握った1848年以降は、自由貿易主義が勃興する。このようなフランス本国での政権の交代と、それに伴う経済体

制の変遷は、以下にみるように、その保護下にあった西アフリカ地域経済に直接・間接的に大きな影響を与えていくことになる。

復古王政は、一時期、セネガルを第二のサン・ドマンゲ（ハイチ）にするべく、プランテーションの開拓に関心を持つものの、その失敗が明らかとなった1830年代以降は、ヨーロッパで需要が高いアラビアゴムの供給地として認識するに留まり、必要最低限以内の費用に抑えるためにも、西アフリカの植民地化にはほとんど関心を持たず、西アフリカ社会の安定の為に現地の部族の長に慣習税を払うことすらも厭わなかった。そして、奴隷貿易が、アフリカ大陸の商人ネットワークなくして成立しえなかったように、19世紀前半においては、フランス人が、アフリカ商人の仲介なくしてアフリカ内陸部と円滑な交易を行うことは不可能であり、両者は、相互依存の関係、つまり、対等なパートナーシップ関係を構築していたと見られている。これに対して、ルイ・ナポレオン政権の誕生以後は、自由貿易主義の推進に呼応するかのようになり、メトロポリス商人の圧力を受けながら、フランスの西アフリカ進出は加速化する。ヨーロッパで需要が高まりつつあった植物油脂原料の入手を目的に落花生のプランテーションが進み、その一方で、西アフリカはヨーロッパ製品の市場としての役割も高めていき、フランスは、こうした交易を滞りなく実行するためには、武力をもって現地社会を平定することも辞さないという姿勢を見せるようになる。そして、ルイ・ナポレオンが失脚した1870年から1884年は、世界的な不況の時期にあたるが、サブサハラアフリカでの植民地領有に消極的でしたらあったフランスにおいても帝国主義が勃興し、ヨーロッパ諸国との間でアフリカの領土を巡っての競争が過熱化し、終にフランスは、ベルリン会議を通じて西アフリカの領有を確固たるものにするのである。そこで、本研究（本稿およびその続編）では、ウィーン体制以降のフランスの西アフリカ進出と、それを受けて、その進出拠点となったセネガル川周辺社会がいかに変容を遂げ、当初、メトロポリス商人と拮抗した関係を構築していたはずのアフリカ商人が、徐々にフランスに従属していく様子を、かつての奴隷貿易の中心地の一つであった港湾都市ボルドーの商人と現地アフリカ人との相克を通してまとめることにする。

セネガルは、図1にみるように、アフリカ大陸の西側に位置し、アラブ地

域とブラックアフリカとの境界を流れるセネガル川以南に広がる地域であり、大航海時代の幕開けと共にヨーロッパ人との海上交易の玄関口となった。一方、ボルドーは、フランス南西部に位置し、拙稿（2004a）（2004b）で触れているように、サン・ドマング（現在のハイチ）との砂糖交易と奴隷交易を通じて18世紀に大繁栄を遂げ、当時、フランスはもとより、世界でも有数の港湾都市の一つであった。その繁栄の下で、多くの資本がボルドーに投じられ、当時、建設された数々の名建築は、現在においても貴重な観光資源となっているばかりでなく、海外の知識や書物の玄関口という好条件に加えて、豊かな貿易商人の庇護の下で文化・文明も生まれ、1713年に設立されたボルドー科学・文学・芸術アカデミーからは、モンテスキューを始めとする啓蒙思想家たちが輩出されていく。しかしながら、フランス革命直後に発生したサン・ドマングの独立とともに、ボルドーは多くの富をもたらしてくれた取引相手を失うことになる。これに加えて、ボルドーは、12世紀、アキテーヌ王妃 Aliénor と結婚した Henri Plantagenet が英国王になったことを契機に、1152年から約300年間英領であったこともあって、英国との繋がりが強いフランスの都市の一つであったが、ナポレオンの大陸封鎖によって、英国との交易関係にも陰りが生じることになる。そうした中で、19世紀、ボルドーは、マルセーユを始めとする新興の港湾都市と競いながら、新たな取引相手地域として、セネガル、インドに新機軸を見出していくのである。

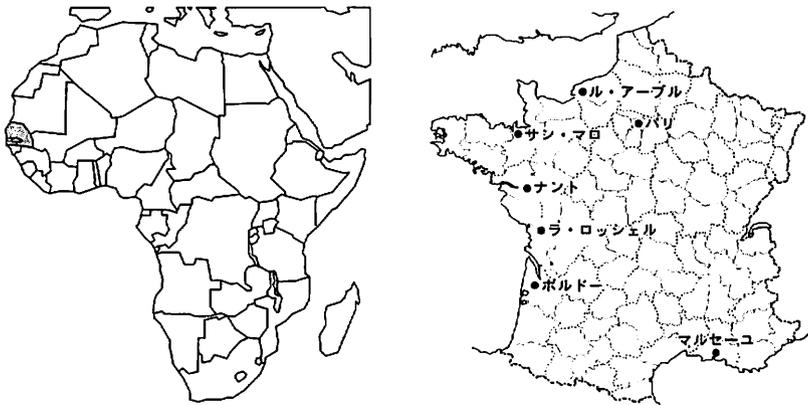


図1 セネガルとフランス港湾都市

元来、フランスは、他のヨーロッパ諸国に比べて、政治的な目的の下で、政府主導でアフリカの植民地化を推進したため、アフリカ植民地からほとんど経済的なメリットは享受していないといわれることも多い。しかしながら、少なくとも、本研究で対象とする期間においては、植民地化に消極的な政府に対して、ブラックアフリカでの経済的利益獲得に積極的なメトロポリス商人たちが、さまざまなロビー活動を通じて、アフリカ進出を政府に働きかけていく様子が観察される。

序論の最後に、本研究に関する資料と主な入手先について言及したい。本研究で必要とする資料は、以下のように広範な地域に分散しており、複写が認められていないものも多いため、幾度かの長期渡航を余儀なくされた。フランス—西アフリカ関係に関する資料は、フランス本国においては、以前、パリのマレ地区にある国立公文書館（ANF）に所蔵されていたが、そのうち、19世紀以降の植民地に関する文書は、南仏のエクサンプロヴァンスに設立された植民地公文書館（CAOM）へ、また、1895年の AOF（フランス領西アフリカ）設立以前に主としてセネガル統治に携わったのは海軍植民地省（時期により、海軍省、海軍局等）であったことから、その部局が関連する部分は、パリ郊外の Vincenne の海軍資料館へ分蔵されている。一方、19世紀以降のフランスのセネガル統治およびダカールのセネガル総督府に関する資料は、ダカールの公文書館（ANS）およびサンルイの「セネガルとその周辺地域に関する資料センター」（CRDS）に多くの貴重資料が所蔵されている。このようにフランス、セネガルどちらにおいても国を横断して複数個所に関連資料が分散していることから、19世紀から20世紀前半のセネガルの歴史研究を行う者はかなりの空間移動を余儀無くされることになる。さらに、本研究では、フランスの港湾都市ボルドー商人の西アフリカ進出に関してまとめるが、それに関しては、ボルドー市のあるジロンド県の公文書館（ADG）、ボルドー税関博物館の資料室、ボルドー市立図書館（AMB）そしてボルドー商工会議所（CCIB）にお世話になった。また、上記以外に、フランス・パリの国立図書館、セネガル・ダカールのブラックアフリカ基礎研究所（IFAN）、ボルドー市立図書館、ボルドー大学などでも貴重な関連資料の入手を行っている。

なお、本研究では、セネガルに進出したボルドーの商会のうち、最も大きな影響力を発揮した商社 Maurel et Prom 社について言及することになるが(続編)、Maurel et Prom 社は、1980年代に、屋号を残したままパリに本拠をおく会社に売却され、Maurel 家の私設アーカイブの資料も、1990年代半ばにジロンド県立公文書館に委譲されたことまではつきとめたものの、資料の状態が良くないということで、現在のところ閲覧が許可されていない。従って、本稿で触れる Maurel et Prom 社に関する部分の多くは、ジロンド県立公文書館に委譲される以前に、私設アーカイブの資料に基づいてまとめられた先行研究に依拠するところが大きい。具体的には、フランスによるセネガル支配と Maurel et Prom 社の関係を論じ、カリフォルニア大学に提出された博士論文 Barrows,L.C. (1974a)、およびそれをまとめた学術論文 Barrows,L.C. (1974b) および Barrows, L.C. (1976)、ボルドー第3大学に提出された修士論文 De Luze,S. (1965)、および Maurel et Prom 社の100周年記念として出版された Baillet,E.(1923) が挙げられる。

## 1. セネガル川周辺地域の概略

### 1・1 フランス商館の設立

1444年頃にポルトガル人のディニス・ディアスがセネガル沖に来航したことを契機に、西アフリカとヨーロッパとの海上交易がポルトガル人によって本格的に開始される。もっとも、ディニス・ディアス到着以前の1360年頃から、セネガルは、フランス北部の港町ディエップの漁民には既に知られた場所であったという<sup>3</sup>。その後、ヨーロッパにおける勢力分布の変遷と伴に、アフリカで交易を行う主たるヨーロッパ人も、ポルトガル人からオランダ人へと推移するが、フランスが、イギリスとともに西アフリカ交易に本格的に参入するのは、三角貿易が本格化する17世紀になってからのことである。

ポルトガルが西アフリカ交易の主たる担い手であった15世紀より、西アフリカ交易の拠点および奴隷の集積・積み出し港としての重要な役割を果たすのは、カーボヴェルデ岬から南側に下ったところに位置するゴレ島(ポルトガル占領時はパルマ島と呼ばれていた)である。ゴレ島は、最大長900メー

トル、幅300メートルの小さな島であるが、現在のセネガルの首都ダカールから船でわずか15分ほどのところにあり、風光明媚で、敵から攻撃および疫病を防ぐ意味でも、好ましい立地条件の下にあった。このゴレ島は、1678年のネイメーヘン条約でフランス領となるが、その後、イギリスに何度か占領され、1814年のパリ条約で、最終的にフランス領としてみとめられ、黄熱病の発生によって一時的に島が放棄される1778年まで<sup>4</sup>、フランスの西アフリカにおける支配の拠点としての役割を果たすことになる。

一方、ゴレ島から北へ300km、現在のセネガルとモーリタニアとの境界に位置するセネガル川の河口にもフランスは交易の拠点を設ける。1638年、ディエップの船長、トマ・ランベール (Thomas Lambert) は、セネガル川の河口付近にあるボコス (Bocos) 島に、フランスの商館を建設する。セネガル川は、内陸の奴隷と金の供給地に繋がっているが、そこから運びだされた商品は、この商館に一旦集められ、再び、ヨーロッパやアメリカに向けて積み出されたのである。しかし、その20年後、この商館は洪水によって流されたことから、1659年、フランス国王の特権会社カーボヴェルデ・セネガル会社のルイ・カイエ (Louis Caillier) によって、ワロ (Walo) 王国の王 (Brak) から、毎年、一定の税を支払うことと引き換えに<sup>5</sup>、ボコス島の傍にある別の島、ンダル (Ndar) 島が譲り請けられ、サンルイ (St Louis) と名づけられる。このサンルイは、英国から奪取された1779年以降、19世紀初頭の英国に占拠された期間を除いて、1902年までフランスの西アフリカ進出の拠点としての役割を果たし、フランス領西アフリカ(AOF)の首都としての機能をダカールに譲った後も、1960年までセネガルおよびモーリタニアの首都としての機能を保持した。なお、現在のセネガル領に該当する領土のほぼ全てがヨーロッパ人の支配下に入るのは、ベルリン会議以後の19世紀末になってからのことであり、それまでは、セネガル領土のほとんどは、図2にみるように、現地の部族や王国の統治下にあった。つまり、19世紀前半のセネガル地域で、ヨーロッパ人の権限が及ぶのは、サンルイ、ゴレ島、および交易のために建設された内陸のいくつかの商館のみにすぎなかったのである。

ヨーロッパとアフリカとの海上交易が活発化するのには、17世紀から18世紀にかけておこなわれた三角交易であるが、その主たる担い手は、ヨーロッパ

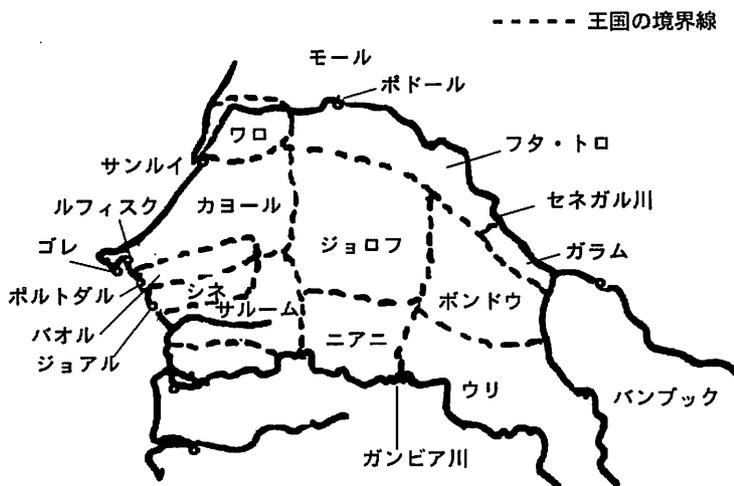


図2 19世紀前半のセネガルの王国

政府から全権と独占交易の特権を付与された特権会社であった。しかしながら、フランスが設立した特権会社においては、オランダやイギリスのそれと比べても効率的な運営は困難であったようで、セネガル地域を対象としたものだけでも、1626年から1758年までの120余年の間に何度も解散を余儀なくされ、この期間だけでも7つの特権会社が設立されている<sup>6</sup>。

特権会社は、交易を行う上で重要な拠点に *fort* と呼ばれる要塞を構築した。要塞と言っても、それは軍事拠点のみを意味するのではなく、交易の拠点 (*comptoir*<sup>7</sup>) でもあり、日本語では、商館と訳されることが多い。文字通り、外的からの防衛を目的に建設されており、サンルイの要塞は、横80メートル、縦20メートルの土地の上に、複数の建物で構成するように建設され、四隅には砦が置かれ、周囲は、数箇所の入り口を除いて、日干しレンガで造った城壁で囲まれ、その外観は、まさに要塞もしくは城であった。このサンルイの *fort* は、フランス人人口の増大とともに、何回かにわたって増設・改築されるが、大砲の使用が一般的になった18世紀半ばになると、こうした要塞の防衛能力に疑問が呈されるようになり、砲台の建設とともに要塞はすたれていく<sup>8</sup>。しかし、サンルイ要塞の場所そのものは、その後、サンルイ総督府、

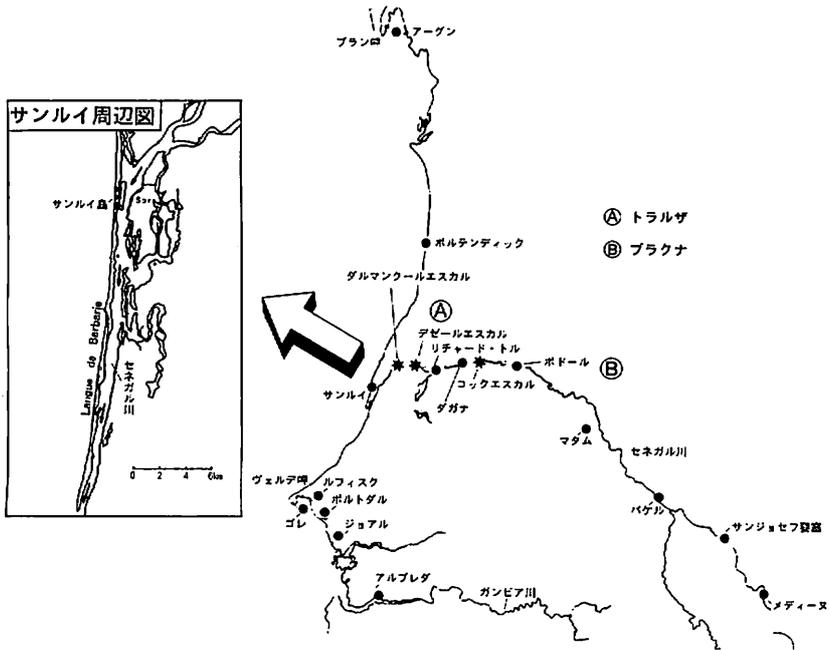


図3 サンルイとセネガル川流域

続いて AOF の行政機構，その後セネガルおよびモーリタニアの行政機構，そして現在では市庁として，常に，西アフリカの行政組織の中心の一つとしての役割を果たし続けることになる。

### 1・2 サンルイ

サンルイ島は，図3に見るように，モーリタニアから突き出した砂嘴 (Lingue de Barbarie) の付け根に向かって，内陸から大西洋岸に流れ出るセネガル川の河口部に存在する幅200m，長さ2.5km，面積にして34ha程の小さな中州島である。当初，サンルイという町は，この小さな島のみを指していたようであるが，19世紀には，サンルイ島から大陸側の Sor と砂嘴それぞれを結ぶよう橋が架けられており，これらの3地域およびその周辺地域も包括してサンルイと呼ぶ。

サンルイの地勢学上の利点は、次の2点である。まず、大西洋からサンルイに辿りつくためには、砂嘴の先から、砂嘴と大陸との間の細い浅瀬を、セネガル川河口部に向かって24キロ上る必要があるが、大洋航海用の船でこの浅瀬を上ることはきわめて困難であり、サンルイは、要塞としても恵まれた場所と考えられていた。実際、砂嘴と大陸との間の細長い浅瀬には、外海とセネガル川が衝突することから、風が強い折には水が渦巻き、船がそこを通過することが困難であった。そのため、しばしば、外洋船の荷物は *Laptot* と呼ばれる船乗りたちによって積荷が小船に積み替えられ、*Gourmet* と呼ばれる舵取りの手に委ねることが必要であった。なお、*Laptot* の意味であるが、フランス語圏西アフリカ地域の歴史家として知られる Catherine Coquery-Vidrovitch は *Laptot* を、*commis, miliciens et marins* (事務員, 兵士, 船乗り)<sup>9</sup> と定義しており、白人の下で、さまざまな雑用をこなす職を意味しているようである。もっともこうした特長にもかかわらず、このサンルイは、1693年、7年戦争中の1758年、そして、ナポレオン戦争中の1811年の3度、イギリスに占領されている。二つめの利点としては、アフリカ大陸との交易において、当時、道路や鉄道が存在しない中、唯一の交通手段は水路であったが、サンルイに流れこんでいるセネガル川は、全長1800キロの大河であり、上流の金やゴム、そして奴隷の供給地であるガラムと直結していたことが挙げられる。つまり、セネガル川と大西洋の交差点であるサンルイは、まさにアフリカ大陸とヨーロッパとの繋ぎ目としての役割を果たしていたのである。

### 1・3 セネガル川周辺の交易の拠点

セネガル川は、上流にいくほど水深が浅くなるため、当初、ヨーロッパ人は航行にかなり苦勞したようである。少し時代が後になるが、1854年にセネガル総督に着任したフェデルブが、1858年にまとめた記述によると、河口から約110キロメートルのところにあるリチャード・トル (Richard Toll) までは、喫水が12フィートの船でも一年中の航行が可能であったのに対して、それより上流になると、河口から約1000キロメートルのメディーヌ (Médine) までなら、喫水8フィートの船であれば一年中、12フィートの船であれば、雨季にあたる7月から11月に限って航行が可能であったという<sup>10</sup>。

以下では、セネガル川で重要な都市について見てみたい。河口から223キロのところにあるポドールは、フタ・トロ (Fouta Torro) というセネガル川中・上流地域のイスラム王国にあり、以前より、現在のモーリタニア側のモール人と、セネガル側のトゥクロー族が行う交易の拠点であった。1744年、インド会社によってここにフランス商館が設立されるが、1758年にイギリスの手に落ちて以降、廃墟として放置されたままになっていた。しかし、この地域は、以前より、フランスに対して敵対的であったことから、1853年—1854年、プロテ (Protet) 総督による侵攻を受けることになる。その後、当時、技官であったフェデルブ (Faidherbe) によって商館が再構築され、ポドールは、再び、フランスにとってこの地域の支配および交易の重要な拠点となる。

ポドールがセネガル川中流域で重要な町であるのに対して、上流地域の中心都市は、河口から約794キロのところにある、後述するガラム地方の最大都市バケル (Bakel) である。バケルは、もともとは、18世紀に、カヨール王国からの侵略を受けたジョロフ帝国からの難民が設立した町であるが、1820年、フランスがその土地の支配者と協定を結んで川を見渡せる高台に商館を建立する<sup>11</sup>。当時、周辺地域はまだフランスの支配下にはなかったため、唯一大砲が整備されていたバケルは、1820年代から1848年まで、この地域で奴隷やアラビアゴムの取引を行った特権会社、ガラム会社の取引の拠点となる<sup>12</sup>。ガラム会社は、それまでメトロポリ政府が組織した一連の特権会社とは異なり、植民地政府とサンルイおよびゴレ島の *habitant* と呼ばれる富裕なアフリカ人商人が、互いにパートナーとして協力し、セネガル取引の独占的な利益確保を目的として運営されていた点に特徴がある<sup>13</sup>。ガラムは、現地語ではガジャーガ (Gajaaga) と呼ばれるが<sup>14</sup>、11月から7月までの乾季においては水量が減少することで取引が不可能であるにもかかわらず、金、奴隷、アラビアゴムを供給する重要な交易地であり、1712年の時点で既に、バケルよりもさらに上流で、現在ではマリ共和国の領土内にあるセネガル川の支流に、サン・ジョセフ要塞を建立するなど、以前よりフランスメトロポリにとって関心の高い地域であった<sup>15</sup>。フランスがほぼ周辺地域を支配下においた1880年代になると、バケルは、1854年にフェデルブによって設立された100数十

キロ上流にあるメディーヌの軍隊司令部とともに、セネガル川上流地域の上級司令官の駐屯地となっている。

一方、ダガナ (Dagana) は、サンルイから144キロのところ、ポドールより下流南岸に位置し、セネガルでのプランテーション開発のために、1819年、ワロ王国から譲渡された土地に建立された都市である。ワロは、モール人からの脅威や、フタ・トロからの侵略に対抗するために、フランスにこの地を提供したとされるが、プランテーション開発に夢中であったシュマルツは、一時は、サンルイに代わって首都をダガナに移転することすらも考えていたようである。一方、ダガナより34キロ下流で、ポドールとサンルイの丁度中間に位置するリチャード・トル (Richard Toll) は、ウォロフ語で「リチャードの庭」を意味するが、フランス人の庭師、クロード・リチャード (Claude Richard) によってサンルイ郊外に形成された植物園が元になっている。リチャードは、1830年代に、ここでさまざまな作物を植え、セネガルでプランテーション可能な作物を研究し、1840年代に本格化した落花生や、現在、リチャード・トルの主要作物である砂糖きびの導入に尽力した。1822年に行政の指揮官として着任した Roger は<sup>16</sup>、このリチャードの庭の中心に巨大な邸宅を建設し、その後、歴代の総督に利用されるが、現在では廃墟として残されている。

先の Faidherbe の調査によると、19世紀半ばのセネガル川流域の総人口は、記録されているものだけで3万4000人、そのうちの約3分の1にあたる1万2081人がサンルイの住人であったようである。

#### 1・4 北アフリカとの関係

セネガルを含めたサブサハラアフリカ地域に経済的利益を求めたのはヨーロッパ人だけではない。ヨーロッパ人がアフリカの大西洋岸に到達するはるか以前の7世紀頃より、アラブ人が現在のサブサハラアフリカ地域と交易を行っており、サハラ砂漠を越えて、北アフリカやヨーロッパへ金や黒人奴隷が輸出されていた。サブサハラ地域からサハラ交易を通じて連れ去られた黒人奴隷の具体的な数については、大西洋の奴隷交易と同様、さまざまであるが、7世紀から19世紀にかけて、サブサハラアフリカからアラブへ運ばれた

奴隷の数は、大西洋交易のそれに匹敵もしくは上回るとする報告もある<sup>17</sup>。また、ヨーロッパは、15世紀以降、キリスト教の伝道者をアフリカへ派遣したが、アフリカの本格的なイスラム化は11世紀に始まっている。8世紀以前から15世紀にかけて、現在のセネガルからチャドに至る地域には、ガーナ、マリ、ソンガイといった複数の帝国が次々と勃興するが、一部を除いて、サハラ交易が多く富をもたらすことを認識していたそれらの帝国の為政者達は、アラブやイスラムへの理解を深め、イスラム聖職者のパトロンとしての役割を果たしながら、イスラム法の導入などを積極的に行っていく。14世紀には、マリ帝国のトンブクトゥーが学術都市として栄えるが、こうしたサハラ砂漠以南の都市へ知識の伝達が可能であったのも、イスラム教を媒介として文字が普及し、文明の受容・継承を容易にする制度が既に構築されていたことも理由の一つとして挙げられよう。ここで重要なのは、ムスリムによる軍事的な征服によってイスラム化が実行された中東や北アフリカと異なり、西アフリカでは、伝統宗教と共存しながら、北アフリカとの商業取引の過程でイスラムを静かに受容していた点である。しかしながら、18世紀から19世紀にかけて、西アフリカで、イスラム教の宗教改革—ジハード—が次々と発生する<sup>18</sup>。ここで言うジハードとは、これまで政治への関与を避けていた聖職者や法学者たちが武装化し、政権を掌握する革命を意味するが、なかでも、セネガル川沿岸地域のフタ・トロでのジハード（1775年頃）は、ヨーロッパ人がセネガル川での交易を続行するにあたって、無視できない影響を与えることになる<sup>19</sup>。

## 2. 19世紀初頭のサンルイとその周辺社会

### 2・1 19世紀、フランスのセネガル進出

長らく、フランスとイギリスはゴレ島およびサンルイの領有権をめぐる激しく争っていた。例えば、7年戦争中（1756-1763）にあたる1658年には、両地域ともイギリス軍の手に落ち、7年戦争終結時の1763年のパリ条約<sup>20</sup>では、ゴレ島とアフリカ大陸上のいくつかの商館のみがフランスに、それ以外のセネガル領土は、インドやアメリカの大半の地域とともにイギリスに割譲する

ことが決められた<sup>21</sup>。しかし、アメリカ独立戦争（1775-1783）中の、1779年1月30日に、フランスはサンルイの奪還に成功し、その際、黄熱病が流行していたゴレ島を捨てて、サンルイに政府機能を移転する。さらに、1783年のアメリカ独立戦争終結時には、ガンビアをイギリス領とする代わりに、サンルイとゴレ島をフランスの領土として認めさせている<sup>22</sup>。しかし、その後、本国フランスで大革命が、続いて、ナポレオン戦争が発生し、その混乱の中で、ゴレ島は1800年5月に<sup>23</sup>、サンルイは1809年7月に再びイギリス軍の手に落ちる。両地域が最終的にフランスの領土として認められるのは、ナポレオン戦争の終結時に調印された1814年のパリ条約の時である<sup>24</sup>。このパリ条約でフランスの所有が認められた地域は、セネガル川流域のサンルイ、ポドール、ガラム、およびモーリタニア領のポルテンディック（Portendick）とアーグン（Arguin）、これに加えてゴレ島とその付属領（Dépendances）にあたるヴェルデ岬（Cap Vert）、ルフィスク（Rufisque）、ポルトダル（Portudal）、ジョアル（Joal）およびガンビアのアルブレダ（Albreda）のみであり、それ以外の地域はアフリカ人の支配下にあった<sup>25</sup>。こうしたことから、フランスメトロポリは、しばらくの間、フランスが所有するこれらの地域を *Sénégal et Dépendances* と呼ぶことになる。なお、パリ条約締結後、直ぐに、イギリスはポルテンディックからアーグンまでの沿岸地域で包括的にゴム取引を行う権利を保留する<sup>26</sup>。

パリ条約を受けて、1816年、セネガルに向けて、初代セネガル総督府の代表となる Schmaltz 大佐がフランスを立つ。この時、彼が乗船したのが、ルーブル美術館所蔵のジェリコーの絵画で知られているフリゲート艦メデューズ号（La Méduse）である<sup>27</sup>。メデューズ号の難破後、救命ボートで避難した彼は、筏上で繰り広げられた地獄絵を経験することなく、無事、サンルイに到着し、7月21日にゴレ島に上陸、英国と交渉を開始する。これにより、パリ条約締結から2年以上経過した1817年、フランスは、条約で定められた地域を英国から譲渡されるが、サンルイ、ゴレ島以外では、ルフィスク、ポルトダル、ジョアルおよびアルブレダの商館が残されているのみで、ポドールやガラムといったセネガル川沿いの拠点は、ほぼすべてが破壊されるか荒廃しており<sup>28</sup>、フランスに敵対的なフタ・トロヤ、アラブ系のモール人の支

配下にあった。

## 2・2 モール人

19世紀初頭のセネガル川の沿岸地域には、遊牧民と農業で生計をたてる定住民の二つのグループが見られた。前者は、セネガル川の北側に居住し、しばしば、英語で Moors, フランス語では, Maure と記述されるモール人である。彼らは、黒人ではなく、現地では、白人"Blanc"と呼ばれる褐色の肌を持ったアラブ人とベルベル人の混血であるが、さらに、このモール人は、トラルザ (Trarza), ブラクナ (Brakna), ダルマンクール (Darmankour) といったいくつかの部族集団に分けられ、それぞれの首長国 (émirat) を形成していた。なかでも、トラルザは、モーリタニア海岸沿いからセネガル川の下流域地に、ブラクナは、セネガル川の中・上流地域を主な生活圏にしており<sup>29</sup>, Maure Trarza, Maure Brakna というように、それぞれを区別して捉えられることもある。Webb(1995)によると、19世紀前半において、前者は約55000人、後者は60000人の人口を抱えているということであるから<sup>30</sup>, サンルイの人口が当時10000人程度であったことを考慮すると、その勢力が無視できないものであったことが理解できる。一方、ダルマンクールは、前二者に比べると小規模の部族であるが、サンルイにもっとも近い、ダルマンクールのエスカルにゴムを持ち込んでいた<sup>31</sup>。

各モール人の王国は、ベルベル系で聖職者や商人としての役割を担うズワヤ (Zwaya) リニエージと、どちらかと言えばアラブ系で兵士としての役割を担うハサニ (Hassani) リニエージの二つのリニエージで構成されており、どちらも共通の首長 (émir) の下にあった<sup>32</sup>。とりわけ、ハサニはしばしば南下し、黒人を拉致して連れ帰り、奴隷にしてアラビアゴム収集のための労働に従事させたり、穀物を略奪するなど、セネガル川南部の黒人社会を脅かす存在であった。トラルザは、主に、ワロからバウルまでを、ブラクナはフタからジョロフにいたる地域 (図2参照) を攻撃するが、黒人たちは、この攻撃にてこずるばかりで、結局、彼らに定期的に税を支払うことで対応するに留まっていた。また、ハサニは、ズワヤがフランス政府やサンルイ商人とゴム取引をする際に、後者の警備を担当し、ゴムの交易量に応じて、お茶代

とか、挨拶料、薪代といった名目で、あたかも見ヶ料のような形で一定金額を徴収していた<sup>33</sup>。フランス軍兵士のいるサンルイではこの納付金の徴収が困難なため、ハサニは、サンルイ商人とズワヤが取引を行う場所をセネガル川沿岸の特定の場所に限定し、その場所以外でゴムの取引をしないよう、フランスに対して圧力をかけていく。なお、この特定の交易地は、フランス語で波止場などを意味するエスカル (escale) と呼ばれた。

### 2・3 セネガル川南部の王国

セネガル川の南側に居住していたのは黒人種であり、主に、フォロフ (Wolof) 族とトゥクロール (Toucoulaure) 族という2つのエスニックグループで構成され、前者は、カヨール (Cayor) とワロ (Walo) という名の、後者は、フタ・トロ (Fouta Tooro) という名の政治集団 (国) を形成していた (図2参照)。カヨールの支配者はダメル (Damel)、ワロのそれはブラク (Brak) と呼ばれ、両国ともに、13世紀、14世紀に栄えたジョロフ帝国へと繋がる<sup>34</sup>。一方、フタ・トロを主に構成しているトゥクロール族は、サヘルと呼ばれる地域一帯に分散して暮らす牧畜民フルベ族との混血であり、熱狂的なイスラム教徒であった。この3国は、出自による極めて硬直的な階層社会であり、それに不満を抱くものがサンルイに移住する様も観察されたようである。

前述のように、フタ・トロは18世紀後半に宗教改革に成功して以来、フランスに対してより敵対的になり、1803年から1805年にかけては、サンルイとフタ・トロの間で奴隷貿易と慣習税を巡って戦争が行われている。中でも、19世紀前半に活躍したエルラジ・オマール・トル (El Hadj Omar TALL) は、同志に聖戦を呼びかけ、1854年、プロテガポドールを陥落させるまで、フランスに対して激しい攻撃を行ったことで知られており、現在でも、セネガルの英雄の一人として挙げられる。フタ・トロは、周辺地域もこの宗教改革に加わるように促すが、ワロの長であるブラクからは誠意ある応対を受けなかったこともあって、ワロに対してもしばしば侵攻を行っていた。19世紀半ばにセネガルの総督として着任したブエ・ヴィロウメ (Bouët-Willaumez,E) によると、フタ・トロは、約100万人の人口を持ち、そのうち、3万人が兵士

であったということであるから<sup>35</sup>、わずか数百人の軍隊しか常駐させていなかったフランスがフタ・トロに手こずったのは想像難くない。

一方、19世紀初頭に、サン・ドマングという重要な植民地を失ったフランスは、1820年頃より、セネガルを第二のサン・ドマングにするべく、プランテーション開発に参画するが、それには、現地の支配者から土地を入手する必要があった。当初、シュマルツ総督は、サンルイからセネガル川を240キロほど上った、肥沃で塩害の影響もないフタ・トロを候補地に考えていた。しかしながら、フタ・トロがフランスに対して協力的でなかったことと、セネガル川下流で、サンルイにも近いワロが自ら土地の提供を表明したことから、プランテーション計画はワロ王国で進められることになる。ワロは、前述のように、18世紀後半より、フタ・トロから宗教改革に参加するよう圧力がかけられており、さらに、トラルザから攻撃をしばしば受けていた。こうしたこともあって、ワロは、フランスに土地を提供することで国土を防衛することを意図するが、これに対して提供された土地はやせており、かつ、塩害の影響が強く、プランテーションとしては決して好ましいものでなかった。フランスは、ワロの中心地ダガナに要塞を建設し、一時はそこを首都にすることも考えに入れながらプランテーション計画に着手するが、結局、期待するほどの成果はだせず、1830年頃には計画は頓挫し、アフリカ産の換金作物に活路を見出すことになる。一方、フランス軍のワロ駐留に対して、トラルザは、首長のムハマド・アルハビブ (Muhamad al-Habib) とワロの王 (brak) の娘とを結婚させることで、ワロと同盟関係を結ぼうとする。こうしたワロを巡るトラルザとフランスの間の軋轢は、1833-1835および1854-1858の直接対立に繋がり、この争いは、結局、フランスのセネガル侵攻に道を開くことになる。

#### 2・4 *Habitant, Négociant* そして *Traitant*

フランスによる本格的な植民地化が実行される以前の17世紀から19世紀にかけて、サンルイやゴレでは、*Creole*、*Signare* および *Enfant du Pays* 等と呼ばれるヨーロッパ人と黒人の混血 (ムラート) が強い影響力を持っていた。サンルイやゴレ島では、そうしたムラートを中心に、*Habitant* と呼ばれる社

会階層が形成され、彼らは、18世紀から19世紀にかけて、現地社会で中心的な役割を果たしていた。*Habitant*とは、「住人」を意味するフランス語であるが、サンルイやゴレ島では、例外として現地文化に同化したヨーロッパ人や富裕なアフリカ人が含まれることもあるが、多くは、自分自身でビジネスを興すに足る資産を保有するムラートのことを指した。

一方、*Habitant*に対峙する語として、*Négociant*という階層も、サンルイやゴレ島には存在した。通常、*Négociant*は、「貿易商人」を指すフランス語であるが、セネガルでは、正式には、政府から交易に携わることの認可を受け、決められた営業税を支払う商人や商會を意味し、多くはフランス人であった。*Négociant*とは別に、現地で小売を担当する *Marchand* という職業もあり、*Négociant*と同様、彼らも政府から認可を受け、決められた営業税を支払うことが求められた。ちなみに、1845年の段階で、サンルイでの *Négociant* の営業税は600フラン、*Marchand* のそれは400フラン、ゴレでは、それぞれ300フランと200フランであった<sup>36</sup>。認可された *Négociant* および *Marchand* については、セネガル総督府が毎年発行する *Annuaire du Sénégal et Dépendances* などで発表されるが、その第一号によると、1858年の時点では、サンルイには、19人の *Négociant* と36人の *Marchand* が認可されていたようである<sup>37</sup>。

一方、*Traitant* は、フランス語の「*traite* (交易) する人」を意味するが、セネガル川上流のエスカルへ赴き、そこでモール人からヨーロッパ商品と引き換えにゴムを買い付ける黒人もしくはムラートを指し、多くは、イスラム教徒であった。*Traitant* には、*Négociant* や *Habitant* から独立して彼らとビジネス関係を結ぶものと、彼らから一定の契約の下で雇用されるものがいた。*Habitant* は、自らが直接セネガル川を上ってモール人からゴムを購入することもあるが、多くは、*Traitant* が持ち帰ったゴムを購入し、直接メトロポリへ、もしくは、サンルイのヨーロッパ商人に売却することを生業としていた。このように、*Habitant* が、主に、セネガル川上流とサンルイ間の取引を取り仕切るという役割に特化していたのに対して、当初、*Négociant* は、*Habitant* から得たセネガル商品—象牙、金、皮革、蜜蝋、奴隷、アラビアゴム—をメトロポリへ輸出し、それと引き換えに、セネガルが求める商品—鉄棒、武器、アルコール、火薬、工業製品、布—を輸入するという取引に特化していた。

つまり、*Habitant* と *Négociant* 両者ともヨーロッパとアフリカ間の交易に従事するのではあるが、*Habitant* がセネガル内陸とサンルイ間の交易を、*Négociant* はサンルイとメトロポリ間の交易に特化するというように、当初、両者の間ではある程度の棲み分けがなされていたようである。なかでも、*Signare* と呼ばれる女性は、サンルイ、ゴレ島および海岸沿いの交易港に住む富裕な混血女性商人を指すが、*mariage à la mode du pays* (現地流の結婚) と呼ばれる形でフランス人男性と“事実上”の婚姻関係を結び、それと同時にフランス人のビジネスパートナーとしての役割を果たしていた。なお、*Signare* という言葉は、最初に西アメリカ海岸に貿易商人として入植したポルトガル語の「婦人」を意味するセニョーラ (*Senhora*) が派生した語である。

19世紀前半まで、サンルイやゴレ島の行政の長は、こうした *Habitant* の中から名士として認知される者をフランス政府が任命していたが、フランス人総督は長くても2年以上同じ人物が務めることがなかったこともあって、*Habitant* のローカル政府での発言力は無視できないほど大きかった。18世紀、サンルイでのフランス人人口は、兵士が40人から200人、それ以外が60人から100人程度であったのに対し、アフリカ人やムラートは合計で3000人程度、そのうち、自由人だけでも500人に達していた<sup>38</sup>。また、*Habitant* の中には、後背地で力を持つフタ・トロやモール人と強い繋がりをもつ者もいて、それが、直接・間接的に、彼らの地位と商取引における優位性を与えた。こうしたこともあって、ヨーロッパ商人がセネガルと円滑な交易を望むなら、*Habitant* の影響力を無視することは不可能であり、19世紀前半までは、フランス人と *Habitant* は、サンルイの均衡した二大支配層を形成し、相互依存かつ補完的な関係を構築していたのである<sup>39</sup>。

1817年にシュマルツが着任して以後、サンルイの町並みは本格的に整備され、島の中心のかつて要塞（商館）が設置されていたところに総督府が建設され、碁盤目状の街路整備とともに、コロニアル風の商館が次々と建てられる。島の南側はキリスト教徒が多く住むが、北側はイスラム教徒の居住区として設定され、それぞれの地域に教会とモスクが設置され互いに融和共存的な関係が構築されていた。しかしながら、*Habitant* およびヨーロッパ人双方の人口が急増するにつれて、両者の間で少しずつ軋轢が生じ始める。1842年

から1845年にかけてセネガル総督を務めたブエ・ウイロウメの著書には、1818年の段階で6000人程度であった人口が、1837年には13000人に急増し、同期間でヨーロッパ商人は、4～5人から30～40人へ、*Traitant*の数も、4～50人から150人程度に増大している旨が記されている<sup>40</sup>。一方、ANSに所蔵されている1857年のサンルイの人口統計では、12,081人の住人が登録されており、そのうち、ヨーロッパ人が、男女合わせて317人、*Habitant*が998人となっている<sup>41</sup>。後者は、センサスに登録されているものだけであるから、実際は、それ以上の人々がサンルイにいたとも考えられる。

## 2・5 *Habitant*の自治：*Maire*

セネガルにコミュン<sup>42</sup>が導入されるのは1872年のことであるが、英国占領中の1763年、公的権威を持つ行政の長—*Maire*—が初めてゴレ島で、翌年の1764年にはサンルイで任命される。多くは、現地で人望のある、混血の富

表1 サンルイとゴレの歴代 *Maires*(1763-1856年)

ゴレ	
1763-1778	KIAKA
1778	Joseph BONNET
?	TURPIN
1820年頃-1849	Armand LAPORTE 副 François de SAINT-JEAN
1849 -1872	François de SAINT-JEAN 副 Jean-Pierre TURPIN
サンルイ	
1764-1778	Charles THEVENOT
1778-1800	Charles CORMIER
1800-1801	Jean FLAMAND
1801	SAINT-JEAN
1802-1816	Charles PORQUET
1816-1823	Pierre DUBOIS
1823-1827	François-Michel PELLEGRIN
1829-1848	Jean-Jaques ALIN
1848-1851	Barthelemy Durant VALANTIN
1851-1856	Nicolas D'ERNEVILLE
1856年8月	François HERICE
1856年10月-1872年	Blaise DUMONT

筆者作成

裕な商人がその職に就いていたが、フランス側の政権の交代とともに、その役割も微妙に変化を遂げる。

表1では、コミューンが導入されるまでの、サンルイとゴレ島における *Maire* のリストをまとめている。*Habitant* から嘆願書が提出されることもあるが、原則として、*Maire* は、通常、総督によって指名され、その指名は、メトロポルの海軍大臣の了承を得て初めて確定された。候補者は、植民地生まれの名士から選ばれることが多かったが、セネガル生まれではない Jean-Jaques ALIN のような例外も見られる。特に任期が定められることはなく、死亡するまで在職することも珍しくなかったようである。

*Maire* の主な役割は、町の治安安定や、フランス人と現地アフリカ人コミュニティの間で立て、さまざまな折衝等に尽力することであるが、1824年頃、当時の総督の職にあったロジェ (Roger) が海軍大臣に送付した手紙では、*Maire* の役割は以下のように定義されている<sup>43</sup>。

a) 町の秩序と清掃の管理監督。b) 軽犯罪に対する刑の執行。c) 現地人の間で発生するさまざまな問題の調停。d) 現地人に対して、彼らと総督もしくは総督が行うサービスの仲介。e) 近隣諸国との間の外交に関する職務の執行。

最後の外交に関する職務についてであるが、とりわけ、ヨーロッパ人は、フタ・トロやモール人と直接交渉をすることが困難であったため、*Habitant* や *Maire* を通じて、彼らとの間のトラブルが解決されることが必要とされた。たとえば、1823年に *Maire* に任命された François-Michel PELLEGRIN は、若い頃にサンルイの秩序を過度に乱す行動をとり、ナントで逮捕・拘禁されたこともあるムラートであったが、サンルイがモール人と和平を結ぶ際に尽力したということで、1823年に *Maire* 職を拝命している<sup>44</sup>。もっとも、*Maire* 自身も、そうした仲裁を担当することで、双方から何かしかの便宜を得ることも少なくなく、必ずしもフランス総督に有利になるように物事を解決するというわけではなかったようである。しかしながら、1840年に地方評議会 (Conseil Général) が設立されて以降、*Maire* の権限は徐々に縮小していき<sup>45</sup>、1845年には、外交問題を取り扱う専門の部署がフランスの行政組織の中に作られることになる。地方評議会は、任期は5年で、総督が指名する選挙人に

よって選出され、10名の *Négociant*, *Marchand* および *Habitant* が地方の予算や支出に対する意見および植民地側からメトロポリ政府に要望を述べる権限が与えられていた<sup>46</sup>。このように、かつて *Maire* に託されていた種々の行政サービスは、1840年以降、徐々に行政組織に移管され、特に、1843-1845に着任したブエ・ヴィロウメ総督は、アフリカに対して強権的な政策をとったことで知られているが、彼の下で、*Maire* や *Habitant* の権限を弱めることが余儀無くされる。もっとも、こうした流れは、1848年、ルイ・ナポレオンの下で第二共和制が発足すると同時に、一時的に停止することになる。

1848年、第二共和制が誕生し、植民地からもフランスメトロポリの立法府に代議士を送ることが認められ、10月30、31日の選挙で、ヴァレランタン (Barthelemy Durant VALANTIN) が、ヨーロッパ人でかつ元セネガル総督でもあったシャトー (Bertin du CHATEAU) を破って選出された<sup>47</sup>。ヴァレランタンは、マルセーユの *Négociant* とゴレの地主の娘との間に生まれたムラートで、フランスで教育を受け、帰国後、交易に携わりながら、サンルイの要職を歴任していた。1836年に結婚した妻の父は、1820年から29年間ゴレの *Maire* を務めたラポルト (Armand LAPORTE) を補佐し、彼の死亡とともに、1849年から1872年までその後を継いだサン・ジャン (François de SAINT-JEAN) である<sup>48</sup>。なお、ラポルトは、本研究の続編で詳しく触れる Maurel et Prom 社の創始者、Hubert Prom と Hilaire Maurel の義理の父親にあたることもここで言及しておく。

ヴァレランタンは着任するやいなや、失われつつあった *Maire* の権限を高めることに尽力する。従来の治安の管理監督や軽犯罪に対する刑の執行のみならず、必需品の価格設定や、総督の承認の下でアレテを公布したり、身分証の登録やパスポートの発行業務の権限を入手した。また、トラルザとブラクナとの間の紛争を事前に妨げたということで、1850年にレギオン・ヌール勲章 (Légion d'Honneur) を授けられている。しかし、ヴァレランタン自身は、これだけでは飽き足らず、さらなる権限を求めたため、次第に、行政との間で軋轢が発生するようになり、これに対して、セネガル総督とパリの海軍大臣との間で、*Habitant* をこうした政策決定過程から取り除く術についての書簡もやりとりされている<sup>49</sup>。また、実現はしなかったものの、ポダン

(Baudin) 総督から官僚たちの監督の下に *Maire* を置くことなども提案されたりもした<sup>50</sup>。

ヴァレンタンの後に *Maire* に任命されたデルヌヴィル (Nicolas D'ERNEVILLE) は、1822年からセネガルで *Négociant* をしているヨーロッパ人であり、ムラートではなかった。折りしも、1851年はフランス大統領であったルイ・ナポレオン自身によってクーデターが敢行された年であり、第二共和制は第二帝政へと移行し、これに伴い、フランス本国においても国民の政治参加の権利は狭められることになる。一方、セネガルにおいても、1854年に総督に着任したフェデルブが、1848年に確定した *Maire* の権限の見直しを始める。1855年3月30日のアレテでは、キリスト教徒の出生証明書を管理する仕事が、1858年6月には、フランスや海外渡航に対するパスポートの発行業務が *Maire* からとりあげられ、1856年の1月9日には、憲兵隊は *Maire* から、総督の指揮下のみ置かれることが決定されている<sup>51</sup>。

### 3. 19世紀前半の換金作物

#### 3・1 アラビアゴム

19世紀、奴隷貿易の収束とともにヨーロッパ人が西アフリカに求めた換金作物はアラビアゴム (アカシアゴム) であった。アラビアゴムは、アカシアの木から自然に、もしくは人為的に傷つけることで採取される親水性粘質物であるが、車のタイヤといったゴム製品の原材料になる天然ゴムとは全く異なる。アラビアゴムは、水を加えると粘質状態になるという性質があるため、古くより、食品、医薬品、切手の裏の糊、インキなどに利用されており、産業革命以後は繊維のプリント、インド綿の艶出し・媒染剤そして印刷・製本といった用途での需要が急速に高まった。こうしたことから、17世紀には、現在のモーリタニア沿岸一帯がヨーロッパ諸国の間で関心の高い地域となり、ブラン岬 (Cap Blanc) 近くのアーグンやその南部のポルテンディックで (図2参照)、フランス、オランダ、イギリスの商社が競ってゴム取引を行っていた。このように、当初、アラビアゴムの主な産地は、その名の通り北アフリカが中心であったが、砂漠化の進展とともに産地がセネガル川沿岸地帯

表2 フランスのセネガルからの輸入(1840-1880)

	セネガルからの 輸入額(百万フラン)			アラビア ゴムの比 率 A	落花生の 比率 B	A+B
	アラビ アゴム	落花生	輸入合計			
1840	3.5		4.4	79.0%		79.0%
1845	4.3	1.4	6.8	63.5%	20.5%	84.0%
1850	1.7	1.6	4.3	40.2%	36.5%	76.7%
1855	3.3	6.2	11.2	29.3%	55.9%	85.2%
1860	4.3	4.0	9.9	44.0%	40.5%	84.5%
1865	4.4	3.3	12.9	34.1%	25.5%	59.6%
1867	5.2	3.7	12.9	40.3%	28.8%	69.2%
1868	5.6	5.1	16.2	34.4%	31.4%	65.8%
1869	6.0	5.2	12.6	47.9%	40.9%	88.8%
1870	5.4	7.7	14.1	38.6%	54.9%	93.4%
1875	1.7	6.5	9.7	17.6%	67.3%	84.9%
1880	5.3	13.2	19.9	26.5%	66.4%	92.9%

注 1860年までの貿易データの集計方法と1860年以降のそれは異なる。

“Tableau Général du Commerce de la France” の1840～1880期間の各巻より筆者作成。

へと南下したことから、先のアーゲンやポルテンディックでは飲み水が不足していたことから<sup>92</sup>、19世紀、ゴム交易の中心はサンルイへと移行する。表2では、1824年以降、毎年、フランス本国で刊行されているフランスの貿易統計書である Tableau Général du Commerce de la France から、フランスのセネガルからの総輸入額と、主たる輸入品である落花生とアラビアゴムの輸入額および、それらの輸入合計に占める比率をまとめている。アラビアゴムは、1840年時点においては、セネガルからの輸入財の大半を、その後、徐々にその比率は低下するも、1880年においても、以前として全体の4分の1を占めていたことが伺える。このアラビアゴムは、セネガル川の右岸で採取されるが、先のモール人が主たる供給者であった。なお、表2からは、セネガルの主たる換金作物が、1870年頃にはアラビアゴムから落花生に交代していることが

表3 ギネーの輸入・輸出量およびその額と取引に占める割合

年	フランスからセネガルへの輸出				フランス領インドからフランスへの輸入			備考
	ギネー			綿布 の比 率(%)	ギネー			
	量(反)	額 (百万フ ラン)	輸出総 額に占め る割合 (%)		輸入量 (反)	額(百 万フラン)	輸出総額 に占める割 合(%)	
1840	109614	2.41	32.3		95574	2.10	52.9	
1845	310584	6.83	42.2	26.1	372284	8.19	70.4	
1850	168514	3.70	37.3	19.3	128348	1.41	57.1	
1855	33225	0.73	6.8	51.7	300249	2.52	57.2	
1860	143347	3.15	22.5	27.8	190313	1.74	30.8	油脂の輸入額 4.63 百万フラン
1865	86739	1.60	11.3	21.1	75870	1.25		Indigoの輸入額 2.47 百万フラン
1867	308245	4.16	27.3	21.3				
1868	246595	3.09	20.0	21.4				
1869	161540	1.94	12.7	24.9				
1870	159652	1.84	15.0	25.5	88248	1.01		ゴマ油の輸入額 1.93 百万フラン
1875	ギネーという項目なし			48.6				
1880	246594	2.91	15.2	24.4				
1885					601714	7.10	27.6	ゴマ油の輸入額 17.38 百万フラン

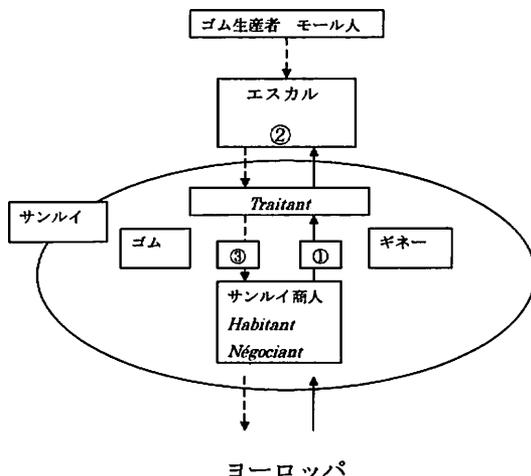
“Table au Général du Commerce de la France” の1840～1880期間の各巻より筆者作成。

伺えるが、落花生は、1840年ごろ、ボルドーおよびマルセーユの商人たちによってセネガルへ導入されている。

さて、ゴム交易の際、モール人が提供するアラビアゴムとの交換のために、しばしば貨幣として用いられたのが、ギネーと呼ばれるインド産の青色薄地綿布である。1843年には、王令で、2.3キログラム以上の重さがあり、縦16.5メートル、横1メートル以上のものをギネーとして定義しているが<sup>53</sup>、それ以前においても、ほぼこれに準じた縦長の青色綿布を指していたようである。ギネーがどのようなもので、どのように用いられていたかについては、セネガル出身の最初の文筆家とされている L'Abbé David Boilat によって、1853年に出版された著名な書籍 *Esquisses Sénégalaises* 上に掲載されたカラー

の素描数枚から伺えよう<sup>54</sup>。砂漠の遊牧民であるモール人は、軽くて肌触りの良いこの青色綿布のギネーをことの他珍重したようである。青色といっても、黒光りする紺色（群青色）に近く、女性は、一枚のギネーを体全体に器用に巻きつけて衣服として用い、男性は、男性用衣服であるブブなどに仕立てて着用したようである<sup>55</sup>。なお、1843年の9月には、フランス領インドからギネーが出荷される際に、それがしのスタンプもしくは印をつけることが、そして、セネガル川でのゴム取引に際しては、その刻印がおされているギネーのみを交換手段として用いることが、再度、王令で義務づけられている<sup>56</sup>。これは、外国産の安いギネー、もしくは薄地の木綿が、ゴム取引の交換手段として利用されることを妨げるねらいがあると思われる。

表3では、1840年から1885年の期間における、フランスのギネーの輸出入量および輸出入額をまとめている。このギネーは、当時、フランスがインドに所有していた植民地ポンディシェリー（Pondichéry）で、セネガル沿岸部での取引向けに織られていたが、上質のインド産の綿布は、モスリンと呼ばれ、薄地で肌触りがよく、モール人は、しばしばフランス製品よりもインド製品の方を好んだという。19世紀前半においては、まだ、排他性の制度が残っ



筆者作成

図4 セネガル川でのゴム取引の流れ

ており、植民地間での交易が禁じられていたことから、インド産のギネーは一旦フランスへ輸入された後、その後、セネガルへ向けて再輸出されるという手順を踏む必要があった。また、表3では、インドからフランスへの輸出およびフランスからセネガルへの輸出にギネーが占める割合も示しているが、その値は決して小さくはないことも伺える。なお、後述するが、1841年のサンルイでのギネーの価格は1反あたり15フランであったようである<sup>57</sup>。

ところで、インド産綿布をギネーと呼ぶ理由であるが、17世紀から19世紀において英国で用いられた金貨 *Guinea* に由来するようである。当時、金の多くは、ギニア湾岸のアフリカで入手されたことから金貨をこう呼んだようであるが、後には金貨の意味を離れ、21シリングを表す計算単位として用いられるようになった。こうしたことから、このインド産綿布は、布として流通するというよりも、通貨としての役割を担っていたことが伺える。

### 3・2 アラビアゴムとインド綿の交易

ゴムとギネーの交易は、ヨーロッパ人に多大な利益をもたらしていたが、19世紀になって、人工の代替財デキストリンの出現や、フランスの交易政策が原因で、ゴム価格の下落と長期的な低下に苦しむことになる。たとえば、Schnapper の調査によると、1839年の時点で、ヨーロッパでは、デキストリンが1キロあたり1.6フラン～1.8フランで取引されていたのに対し、セネガルのゴムは、1キロあたり4.0フラン～4.8フランの価格付けがなされていたという<sup>58</sup>。さらに、ナポレオン戦争終結後の1814年に誕生した復古王政は、イギリスからフランスへ再譲渡されたサンルイに対して、1819年、再び、「排他主義 (Pacte Colonial もしくは *Le système de l'Exclusif*)」を導入するが、これがデキストリンに対するゴムの価格競争力をさらに低下させることになる。排他主義とは、17世紀以降、フランスで徐々に取り入れられていった保護貿易政策の一種であり、植民地が自律的に諸外国と交易をすることを妨げ、植民地利益をメトロポールへ一元的に吸収するためのシステムであった。実際、メトロポール本国で必要とするアラビアゴムは、セネガルから輸出されたそれのわずか5分の1程度にすぎず、残りは、イギリス、ドイツ、スイス、ロシア等で需要されていたが<sup>59</sup>、植民地と諸外国との直接交易を禁じる「排他主義」

の導入は、それらをフランスに一旦輸入し、その後、再輸出することを強制することとなり、最終消費地でのゴム価格を押し上げたのである。この「排他主義」は、ゴレでは、1822年に保税地に認定されると同時に廃止されたが、サンルイでは1852年まで継続された<sup>60</sup>。

ゴム交易は、予め、奴隷を使って集めたゴムを、セネガル川の右岸にある所定のエスカルと呼ばれる「市場」へモール人が運び込み、そこで、サンルイから来た仲買人に、ギネーと交換に引き渡される。1821年および1835年に、フランスはモール人に対して、セネガル川のデゼール (Désert) およびコック (Coq) といったエスカルでのゴム交易独占を認める協定を結んでいる<sup>61</sup>。また、フランス商人やフランス政府は安定的にゴムを入手することを目的にモールの長やセネガル川沿岸の部族の長に毎年慣習税を支払っていたが、こうした制度は、フェデルブが総督になった1854年に廃止されている<sup>62</sup>。具体的な交易の期間はサンルイに設置された総督の私設諮問委員会である Conseil Privé と交易委員会 (Comité de Commerce) で決定されるが<sup>63</sup>、通常、乾季の1月から6月下旬～7月上旬の期間に行われた<sup>64</sup>。そのうち、1月から3月までの期間は、交易量が少なく、「小さい交易 (Petite traite)」と呼ばれたのに対して、4月から雨季の始まる頃、つまり7月上旬までは、ゴム交易の繁忙期にあたり、「Grande Traite (大きな交易)」とされた<sup>65</sup>。交易の季節になると、ゴム買い付け人たちの小船は、防衛のための軍艦を一・二隻伴って、サンルイからセネガル川上流に向けて同時に出発し、交易の終了とともに揃って帰還した<sup>66</sup>。平均的な船の大きさは20～40トノーということであるが<sup>67</sup>、フランス語で樽を意味する単位であるトノーは、フランスでは一般に1.18立方メートルということであるから<sup>68</sup>、せいぜい23～47.2立方メートル足らずの船であったようである。しかし、*Traitant* たちは、交易期間中、その船上で生活することを余儀なくされた<sup>69</sup>。なお、エスカルでは、アフリカ側との協定で、バケルを除いて、恒久的な建造物を建設することは認められていなかったのので、取引は、船の上や岸でおこなわれていたようである<sup>70</sup>。

主なエスカルは、図3に見るように、サンルイから96キロ上流にあるダルマクールと、そこからさらに4キロ上ったデゼールエスカルであり、これらはモール人の一部族であるトラルザによって管理運営されていた<sup>71</sup>。特に、

デゼールは、最も活気のあるエスカルの一つであったが、そこでの市場価格が低下すると、モール人はイギリスがゴムを購入するポルテンディックに運んだり、次の年に取引を持ち越したりしたため、フランスのゴム交易量が減ることが指摘されている<sup>72</sup>。一方、サンルイから200キロ上流のcockというエスカルは、モール人の中でも、ブラクナ族によって管理されていた。サンルイから上ってきた *Traitant* は、こうしたエスカルで何週間も過ごしたが、その間、モール人に対して、ギネー以外にもお茶や食料といった贈り物を提供し、より有利な条件でビジネスを成功させることに腐心した。モール人は、*Traitant* を互いに競わせて、できるだけ有利な条件でゴムとギネーを交換するようさまざまな策略を巡らせるようである。

図4では、サンルイ商人、*Traitant* およびモール人との間で実施されたゴムとギネーの取引の概略を示している。取引の時間的経緯は①から②そして③へと進むが、②のエスカルにおいては、ゴムとギネーの交換が同時に成立することが可能であるのに対して、①と③の取引には時差が生ずるため、後日、決められた量のゴムを支払うことを約束に一定量のギネーを事前に渡すという、ヨーロッパ商人から *Traitant* に対する掛売り（信用売り）を意味する。*Traitant* はヨーロッパ商人から引き渡されたギネーを（取引①）、セネガル川上流に設けられた取引所エスカルに運び、そこで、モール人との交渉を通じて、ギネーとゴムの交換を行い（取引②）、それをサンルイに持ち帰り、まずは、事前に約束していた量のゴムをヨーロッパ商人に引渡し（取引③）、残りをヨーロッパ商人に買い取ってもらい収入としていた。この時、②の取引は、介入がある場合を除いて、需給均衡に基づいてゴムとギネーの相対価格が決定されており、仮に、サンルイから輸出されるギネーの量が、ゴムの供給量に比べて相対的に多ければ、ギネー一反に対して交換されるゴムの量は減少、つまり、ギネー価値の低下を、逆の場合は、ギネー一反に対するゴム交換量の増大、つまりギネー価値の上昇を招いた。一方、サンルイでのヨーロッパ商人と *Traitant* 間の取引においては、ギネーの引渡しとの間に時差が生じるため、①で事前に決められたギネー一反に対するゴムの交換量（レート）が、②で成立するそれを上回ることになった場合、*Traitant* は、その差額分にあたるゴムの量を自己の負担の下で支払うことを強いられることにな

り、余裕のない *Traitant* は、これによりヨーロッパ商人に対して債務を負うことになった。

ゴム交易によって、商人および *Traitant* がどの程度の利益を得ていたのか、1841年の取引を、セネガル総督府からフランスメトロポルの貿易政策事務局に送付された手紙を参考に見てみよう<sup>73</sup>。なお、この年は、図4の②にあたるエスカルでの取引価格が王令で固定されていたため、サンルイでは、ギネー一反は16.5キロのゴムと交換されるという約束で *Traitant* に卸されていた<sup>74</sup>。セネガル側の報告によると、ギネー一反をエスカルに運ぶ諸費用はサンルイでのギネー価格の45%程度ということであるから、それをゴムに換算して割り出した値は、ギネー一反あたり7.5キロとなり、これを原価の16.5キロに加えると、ギネー一反をエスカルまで運ぶ総費用はゴムに換算すると24キロとなった。一方、エスカルに運ばれたギネーは、王令で27キロのゴムと交換されることが取り決められていたが、通常、公定価格に約10%の手数料等が上乘せされて30キロ/反で交換されたということであるから、*Traitant* のギネー一反あたりの利益は、収入-費用より30キロ-24キロとなり、6キロとなった<sup>75</sup>。ゴムはサンルイでは、1キロあたり1.3フランで購入されたということであるから、*Traitant* はギネー一反あたり、ゴム6キロ分、つまり7.8フランの利益を得たことになる<sup>76</sup>。一方、サンルイの商人がギネー一反をヨーロッパから入手するコストは、報告によると15フランであった。ギネー一反は16.5キロのゴムと交換されるが、ゴム1キロは1.3フランで売られることから、21.45フランの価値を持つことになる<sup>77</sup>。従って、サンルイの商人は、21.45フランマイナス15フラン、つまり、ギネー一反あたり6.45フランの利益を得たのである<sup>78</sup>。この年のゴム交易量は、通常の年よりも少なく1,500,000キログラムであったが、公定価格の27キロ/反で単純に計算すると、それはセネガル川全体で55,555反のギネーと交換されたことになる<sup>79</sup>。これに *Traitant* のギネー一反あたりの利益7.8フランを掛け合わせると、*Traitant* の総利益は433,329フラン、同じく、サンルイ商人にのそれは358,329フランとなった<sup>80</sup>。

これらの値がどの程度の価値を示すかは、同時期の物価と比較することでおよそ見当がつくはずであるが、1836年、Maurel et Prom 社がボルドーからセネガル渡航のために雇用した船長の月給が200フラン、見習いのそれは

30フランであったとの報告がある<sup>81</sup>。また、1848年の革命が物価に与えた影響と12年の時差を考慮する必要があるが、1853年、ボルドーの労働者の公定賃金は、例えば、洗濯業の雇用者で、日給1.25～2フラン（賄いなし）、貴金属・金銀細工師で2～5フラン（同）となっている<sup>82</sup>。こうしたことから鑑みると、ギネーを一反交換することで得られる利益は決して小さくはないことが理解できるが、その一方で、1反15フランというギネーの価格そのものも、見習いの船乗りの月給半月分に相当することから、破格の値段であったことも読み取れる。1838年のセネガルでの財価格リストにおいても、ギネー一反の価値は20.9フランであるのに対して、牛一頭は50フラン、小麦1キロが0.625フラン、ワイン1リットル0.38フランとのことであるから、やはり、他の財と比べても、ギネーの価格が相対的に高くつけられていたとみられる。当時の貿易統計は、公定価格もしくは帳簿上の価格で記されており、統計上の価格と実際に入手する価格の差がどの程度なのか、現在のところ筆者は十分に把握しておらず、これについては別の機会に改めてまとめることにする。

次稿では、このゴム交易を巡るヨーロッパ商人と *Habitant*、*Traitant* の対立および19世紀半ばのフランスの西アフリカ統治についてまとめた。 (続)

## 付 記

本稿は、科学研究費補助金 種目 若手研究B 細目 経済史 課題番号17730216 研究課題“域外企業が地域経済の深化に与える影響—仏企業のセネガルにおける史的展開を中心に—”および、平成17年度学長戦略経費（重点研究経費：若手の萌芽的研究）整理番号1714505 研究課題“フランス商社の西アフリカにおける史的展開とその影響”に基づく研究である。

## 注

- 1 Hopkins, A.G., "Imperial Business in Africa Part II. Interpretations", *Journal of African History*, XVII, 2 (1976), pp.274-275.
- 2 筆者が本研究を遂行していく上で入手した先行研究の多くは、1970年代前半に集中しており、Hopkins によるこの論文を含めて、1970年代が、19世紀のアフリカにおけるヨーロッパビジネス研究の最盛期であったような印象すら持たずにはいられない。つまり、現在のところ、Hopkins によって指摘された課題が未達成のまま、「非公式

- な帝国主義」に関する研究のブームは収束したようにも見受けられる。
- 3 1854年から1904年にかけて毎年セネガルで発刊された官報の一種、*Annuaire du Sénégal et Dépendance* に掲載されている年表に基づく。
  - 4 Brigaud, F. et Vast, J., *Saint-Louis du Sénégal ville aux mille visages*, Editions Clairafrique, Dakar, 1987, p.83.
  - 5 三反のギネー、深紅の布、7本の鉄棒（分割前）、10パイントのコニャックが税の内容内容だったようである。Aidara,A.H. "Saint-Louis du Sénégal:d'hier à aujourd'hui", Grandvaux, Paris,2004.
  - 6 1. Compagnie normande ou association des marchands de Dieppe et de Rouen (1626-1664). 2. Compagnie des Indes occidentals(1664-1673). 3. Compagnie d'Afrique (1673-1682). 4. Compagnie du Sénégal (1682-1695). 5. Compagnie du Sénégal, cap Nord et cote d'Afrique(1695-1709). 6. Compagnie du Sénégal(1709-1719). 7. Compagnie des Indes (1719-1758). *Annuaire du Sénégal et Dépendance* に基づく。
  - 7 英語では、Trade Castle と呼ばれるようである。
  - 8 Sinou, Alain, *Comptoirs et Villes Coloniales du Sénégal: Saint- Louis, Gorée, Dakar*, Karthala, 1933, Ch. 2 および p.117.
  - 9 Coquery-Vidrovitch , Catherine, *L'Afrique et les Africains au XIX siècle: Mutations, Révolutions, Crises*, Armand Colin,1999, p.47.
  - 10 Faidherbe,L., "Notice sur la colonie du Sénégal et sur les pays qui sont en relation avec elle", *Annuaire du Sénégal et Dépendances pour l'année 1858*, Saint-Louis, Imprimerie du Gouvernement, p.72.
  - 11 Clark, A.F. and Phillips, L.C., *Historical Dictionary of Senegal*,2 Ed.2 Ed. p.71.
  - 12 Guernier D'Eugene dir. "Afrique Occidentale Francaise,TomI", *L'Encyclopédie de l'Empire Français, L'Encyclopédie Coloniale et Maritime*, 1949, p.50.
  - 13 Clark, A.F. and Phillips, L.C., *op.cit.*, p.92.
  - 14 もともと Gajaaga 自身は、ガーナ王国から移ってきたソニンケ人によって、8世紀から14世紀頃に存在した王国を意味するが、フランス人がガラムと言う場合には、サン・ジョセフあたりを指していたようである。
  - 15 Delafosse, M., "Afrique Occidentale Francaise" *Histoire des Colonies Françaises et de l'Expansion de la France dans le Monde Tome 5*, 1931.
  - 16 この時期、肩書きは司令官（Commandant）であり、正式には総督（Gouverneur）という呼び名は使われていなかった。Gouverneur という名称が使われるのは、1828年1月に着任した Jubelin 以降である。しかし、多くの先行研究では Shumaltz 以降、Gouverneur という名称を使っているようである。Schefer, Chritian, *Instructions Générales données de 1863 à 1870 aux Gouverneurs et Ordonnateurs des Etablissements Français en Afrique Occidentale*, Tome I (1921), Tome II (1927), Societé de l'histoire des colonies françaises.

- 17 Mbokolo, E., "Afrique Noire Histoire et Civilisations" Tome I, 1995, pp.175-176.
- 18 イスラム聖職者は政治集団の枠を超えて繋がりがあり、相互に影響を与えたと考えられる。たとえば、1675年に、サハラ砂漠の南西部で発生した Nasil al-Din のジハードは、Bondu (1690年), Futa Jallon (1725年), Futa Toro (1775年) のジハードに影響を与えたという報告がある。Lissak, M and U. Almagor, "Sociopolitical roles of Muslim clerics and scholars in West Africa", Cohen, E. ed. *Comparative Social Dynamics: Essays in honour of S.N. Eisenstadt*, 1985, p.102.
- 19 こうしたジハードの原因はさまざま考えられるようであるが、西アフリカにおいては、従来、聖職者達がいた都市ではなく、農村地帯でこうしたジハードが発生していることから、①帝国が衰退しつつあったときに生じた聖職者と為政者の対立、②その際、聖職者は遊牧民から支持されるが、その背景には、砂漠の乾燥化や、ヨーロッパとの交易が原因で、遊牧民と農耕民との間で軋轢が生じていたこと、また、③スーフイズムや近隣地域でのジハードの発生等を指摘するものが多い。Nehemia Levtzion, *Islam in West Africa*, Variorum, 1994.
- 20 1763年のパリ条約の第10条に「英国国王陛下はフランスに対し、〔西アフリカの〕ゴレ島をそれが征服されたときの状態において返還し、フランス国王陛下は英国国王陛下にセネガル川を、サンルイ、ポドル、ガラムの砦および商館、そして前記セネガル川の利権、付属領のいっさいとともに、完全なる権利のもとに割譲し、保証する」とある。
- 21 セネガル北部のゴム、セネガル川上流部にあるガラムの金、モーリタニアの奴隷の重要性を主張した Choiseul 外相の強い希望が背景にあったという。出所、Delcourt, J., *La Turbulente histoire de Gorée*, Editions Clairafrique, 1982, Dakar, pp.48-51. また、この時、フランスが所有していたカリブ海の西インド諸島のいくつかもイギリスに引き渡されている。
- 22 Delcourt, J., *op.cit.*, p.56.
- 23 1793年と1797年の二度にわたるイギリス軍の攻撃の後、1800年4月4日、ゴレ島はイギリス軍の手に落ちる。その後すぐに、サン・ルイの駐留軍がゴレ島をフランスの元に取り返すが、その6週間後に、再び、イギリス軍に奪い返される。Delcourt, J. *Gorée Six Siècle d'Histoire*, Editions Clairafrique, Dakar, 1984.
- 24 両地域にフランス人の総督(司令官)が赴任するのは1817年。
- 25 Guernier D'Eugene dir., *op.cit.*, p.78.
- 26 *Ibid.*, p.78.
- 27 メデューズ号は、1816年6月17日に、フランスのラロッシュェル (La Rochelle) 傍にある小さな島、エクス島 (Ile d'Aix) を他の3隻の戦艦 (L'Echo, La Loire, L'Argus) と共にセネガルに向けて出発した。この一団には、362人が乗船しており、そのうち240人は、イギリスから割譲されたセネガル統治のために送られた Schmaltz 大佐指揮下の兵士および行政官であった。当初、4隻は揃って南下していたが、徐々に互いに

姿が見えなくなり、メデューズ号は、エコー号と離れて単独になった後の7月5日、浅瀬に乗り上げて難破してしまう。メデューズ号の Chaumareys 船長は、混乱で取り乱してしまっただけ、Schmaltz 大佐が指揮をとるが、メデューズ号には十分な避難ボートが搭載されていなかった。そこで、士官用艦載小艇には Chaumareys 船長と何人かが、もう一つの救命ボートには Schmaltz 大佐と同じく何人が乗船し、泥酔状態であった17人が Méduse 号に取り残され、147名が俄仕立ての筏に搭乗することになる。しかし、この147名のうち、3週間後に筏が発見されたときに生き残っていたのはたった15名であった。消失した人の多くは、途中で餓死したり、波にさらわれたり、生き残った人の餌食になったとされている。一方、避難ボートと士官用艦載小艇に搭乗した64人は、無事に何事もなく、サンルイに到着した。Maurel Jean, "Bordeaux et la Pacification du Sénégal", *Annales de la Faculté de Droit de l'Université de Droit de Bordeaux, série Economique* (IERSO), 1953, pp.181-184.

28 Institut Géographique National, Atlas National du Sénégal, 1977, p.58.

29 Coquery-Vidrovitch, Catherine, *op.cit.*, p.50.

30 Webb, J.L.A., *Desert Frontier. Ecological and Economic Change along the Western Sahel 1600-1850*, Madison, The University of Wisconsin Press, p.227 Cité par Coquery-Vidrovitch, Catherine, *op.cit.*, p.51.

31 Boilat, Abbé David, *Esquisses Sénégalaise*, Karthala, 1984, p.369.

32 Coquery-Vidrovitch, Catherine. *op.cit.* p.50. しかし、モール人の社会構造は、ここで述べている以上に複雑であり、ハサニのズワヤに対する優越性や、各リニエージンでのパトロン-クライアント関係等、重層的な依存関係が指摘されている。参考 Stewart, C.C. and Stewart, E.K., *Islam and Social Order in Mauritania: A case Study from the Nineteenth Century*, 1973, Clarendon Press, Oxford., Ch.3.

33 Marcson, Michael David, *European-African Interaction in the Precolonial Period: Saint Louis, Senegal, 1758-1854*, A dissertation presented to the Faculty of Princeton University in Candidacy for the degree of Doctor of Philosophy, 1976, p.4.

34 Marcson, M.D., *op.cit.*, p.6.

35 Bouët-Willamez, E., *Commerce et Traite des Noirs aux Côtes Occidentales D'Afrique*, Imprimerie Nationale, 1848, p.34.

36 Ministère de la Marine et des Colonies, *Compte Définitif des dépenses de l'exercice 1845, et situation provisoire de l'Exercice 1846*, Imprimerie Nationale, 1848, p.81.

37 Annuaire du Sénégal et Dépendances pour l'Année 1858, p.65-66.

38 Marcson, M.D., *op.cit.*, p.14.

39 Marcson は、18世紀のサンルイの出生証明書 (etat civil) によると、アフリカ人がフランス人の名付け親に、もしくはその逆のケースもしばしば観察され、フランス人とアフリカ人の間に緊張関係が観察されない旨が指摘されている。Marcson, M.D. *op.cit.*, 1976, p.14.

- 40 Bouët-Willaumez, E., *op.cit.*, pp.12-13.
- 41 ANS, 22G6.
- 42 フランスの最小行政単位, 市町村。
- 43 Zuccarelli, F., *Les maires de Saint-Louis et Gorée de 1816 à 1872*, Bulletin de l'I.F.A.N, Tome XXXVV, Serie. B, No.3, 1973, p.556.
- 44 Zuccarelli, F., *op.cit.*
- 45 Marcson は, Conseil Privé(私設諮問委員会1830-1840)の構成メンバーが, 従来の官僚5名およびHabitantとNégociantから選出された民間人5名の合計10名から, 1840年9月3日の王令で, 行政評議会(Conseil d'Administration et de Gouvernement 1840-1879)に改組された際に, その構成メンバーが官僚5名と総督によって任命される2名の名士(民間人)に減少していることを指して, Habitantの権限が縮小したとしている(Marcson, M.D., *op.cit.*, p.203)。もっとも, この1840年の王令では, 地方評議会(Conseil Général)と控訴院(Cour d'Appel)の設立も発布されており, さらに前者の構成メンバーは, Négociantを含むヨーロッパ人4名, 現地人4名, 小売業に携わる商人2名の計10名(任期5年)となっていることから(Brigaud, F. et Vast, J., *Saint-Louis du Sénégal ville aux mille visages*, Editions Clairafrique, Dakar, 1987, p.61), 行政評議会でのHabitantのウエイトの低下が, 直接サンルイにおけるHabitantの権限低下を意味しているかは検討の余地がある。しかしながら, これまでカリスマ的な権力をもつMaireに託されていた種々の行政サービスが, 1840年以降, 新たな組織の導入によって徐々に制度化されたことは事実であり, そういう意味では, Maireの権限が縮小しているということが言えるかもしれない。
- 46 Brigaud, F. et Vast, J., *Saint-Louis du Sénégal ville aux mille visages*, Editions Clairafrique, Dakar, 1987, p.61.
- 47 有効票2071のうち, 1080票を獲得。対するDU CHATEAUは, 697票に留まった。
- 48 Zuccarelli, F., *Les maires de Saint-Louis et Gorée de 1816 a 1872*, Bulletin de l'I.F.A.N, Tome XXXVV, Serie. B, No.3, 1973, p.561.
- 49 Zuccarelli, F., *op.cit.*, p.569.
- 50 Minister to Aumont, ANS, 1B56, 8 January 1851, F40-41.
- 51 Zuccarelli, F. *op.cit.*, 1973, p.572.
- 52 Coquery-Vidrovitch, Catherine, *op.cit.*, p.54.
- 53 Ordonnance 18 Mai, 1843. cite par E. Bouët-Willaumez, *op.cit.*, pp.7-8.
- 54 Boilat, L'Abbé David, *Esquisses Sénégalaises*, Bertrand, Libraire-Editeur, Paris, 1853. 本著は, 1984年, パリのKarthala社から再出版されている。
- 55 *Ibid.*
- 56 Ordonnance 1er Septembre, 1843およびOrdonnance 18 Mai, 1843. cite par E. Bouët-Willaumez, *op.cit.*, 1848, pp.9-10.
- 57 セネガル総督府からパリの貿易政策事務局(Bureau du Régime politique du Commer

- ce)に宛てられた手紙。ANS, 2B18, 11 Septembre, No.390, 1841, F119.
- 58 Schnapper, B., La fin du regime de l'exclusif: le commerce etranger dans les possessions francais d'Afrique Tropicale (1817-1870), *Annales Africaines*, 1959, p.160.
- 59 Marcson, M.D., *op.cit.*, p.156.
- 60 Schnapper, B., *op.cit.*, pp.181-191.
- 61 Barrows, L.C., "Faidherbe and Senegal: A Critical Discussion", *African Studies Review*, Vol.XIX, No.1,1974, pp.255-256.
- 62 Faidherbe,L., *op.cit.*, p.129-131.
- 63 Chambre des Députés に宛てられたボルドー商人によって書かれた論文, *Mémoire sur le Commerce du Sénégal et la Traite de la Gomme*, Bordeaux, le 20 Mai, 1842, p.4., ADG, 8M14.
- 64 Boilat, Abbé David, *op.cit.*, 1984, p.369.
- 65 *Ibid.*
- 66 *Ibid.*
- 67 Chambre des Députés に宛てられたボルドー商人によって書かれた論文, *Mémoire sur le Commerce du Sénégal et la Traite de la Gomme*, Bordeaux, le 20 Mai, 1842, p.5. ADG, 8M14.
- 68 ただし、英国では、2.83立方メートルである。実際には仏式、英式、どちらのトノーで示されているのか理解できないが、小船であったということであるから仏式で計算している。
- 69 *Mémoire sur le Commerce du Sénégal et la Traite de la Gomme*, Bordeaux, le 20 Mai, 1842, p.5. ADG, 8M14.
- 70 Barrows,L.C., *op.cit.*,1974a, p.249.
- 71 Marcson, M.D., *op.cit.*, p.6.
- 72 Coquery-Vidrovitch, Catherine, *op.cit.*, p.56.
- 73 セネガル総督府からバリの貿易政策事務局(Bureau du Régime Politique du Commerce)に宛てられた手紙。ANS, 2B18, 11 Septembre, No.390, 1841, F119.
- 74 *Ibid.*
- 75 *Ibid.*
- 76 *Ibid.*
- 77 *Ibid.*
- 78 *Ibid.*
- 79 *Ibid.*
- 80 *Ibid.*
- 81 Séverine de Luze, *La Maison "Maurel et Prom" 1828-1870*, *Mémoire de Université de Bordeaux III*, DC 583,1965.
- 82 Salaires Industriels dans la ville chez le lieu de Département l'année 1853, Archives

Municipales de Bordeaux, 500F5.

本文中で言及した書籍・論文のリスト

- Aidara, Abdoul Hadir, *Saint-Louis du Sénégal: d'hier à aujourd'hui*, Grandvaux, 2004.
- Baillet, E., *Les Etablissements Maurel et Prom*, René Samie, Bordeaux, 1923.
- Barrows, L.C., *General Faidherbe, the Maurel and Prom Company, and French Expansion in Senegal*, A dissertation submitted in partial satisfaction of the requirements for the degree Doctor of Philosophy in History, University of California, L.A., 1974a.
- Barrows, L.C., "The Merchants and General Faidherbe, Aspects of French Expansion in Senegal in the 1850's", *Review Francaise d'Outre-Mer*, T. LXI, No.223, 1974b.
- Barrows, L.C. "Faidherbe and Senegal: A Critical Discussion", *African Studies Review*, Vol.XIX, No.1. 95-117, 1976.
- Boilat, Abbe David, *Esquisses Sénégalaise*, Karthala, 1984. (Bertrand, Libraire-Editeur, Paris, 1853).
- Bouët-Willamez, E., *Commerce et Traite des Noirs aux Côtes Occidentales D'Afrique*, Paris Imprimerie Nationale, 1848.
- Brigaud, F. et Vast, J., *Saint-Louis du Sénégal ville aux mille visages*, Editions Clairafrique, Dakar, 1987.
- Coquery-Vidrovitch, Catherine, *L'Afrique et les Africains au XIX siècle: Mutations, Revolutions, crises*, ARMAND COLIN, 1999.
- Clark, A.F. and Phillips, L.C., ed. *Historical Dictionary of Senegal*, 2<sup>nd</sup> Ed., 1994.
- De Luze, Séverine., *La Maison "Maurel et Prom" 1828-1870*, Mémoire de Université de Bordeaux III, DC 583, 1965.
- Delafosse, M., "Afrique Occidentale Francaise" *Histoire des Colonies Françaises et de l'Expansion de la France dans le Monde Tome 5*, 1931.
- Delcourt, J., *La Turbulente histoire de Gorée*, Editions Clairafrique, Dakar, 1982.
- Delcourt, J., *Gorée Six Siècle d'Histoire*, Editions Clairafrique, Dakar, 1984.
- Faidherbe, L., "Notice sur La colonie du Sénégal et sur les pays qui sont en relation avec elle", *Annuaire du Sénégal et Dépendances pour l'année 1858*, Saint-Louis, Imprimerie du Gouvernement, 1858.
- Guernier D'Eugène dir. "Afrique Occidentale Francaise, Tom I", *L'Encyclopédie de l'Empire Français, L'Encyclopédie Coloniale et Maritime*, 1949.
- Hopkins, A.G., "Imperial Business in Africa Part II. Interpretations", *Journal of African History*, XVII, 2, 1976.
- Institut Géographique National (Sénégal), *Atlas National du Sénégal*, 1977.
- Lissak, M and U. Almagor, "Sociopolitical roles of Muslim clerics and scholars in West Africa", Cohen, E. ed. *Comparative Social Dynamics: Essays in honour of S.N.*

Eisenstadt, 1985.

正木馨, 「18世紀フランス重商主義と交易都市の繁栄: Bordeaux と三角貿易」『釧路公立大学紀要, 人文・自然科学研究』, 2004a。

正木馨, 「19世紀フランスのセネガル進出とボルドー商人」『釧路公立大学地域研究』第13号, 2004b。

Marcson, Michael David, *European-African Interaction in the Precolonial Period: Saint Louis, Senegal, 1758-1854*, A dissertation presented to the Faculty of Princeton University in Candidacy for the degree of Doctor of Philosophy, 1976.

Maurel Jean, "Bordeaux et la Pacification du Sénégal", *Annales de la Faculté de Droit de l'Université de Droit de Bordeaux, série Economique* (IERSO), 1953.

Ministère de la Marine et des Colonies, *Compte Définitif des dépenses de l'exercice 1845, et situation provisoire de l'Exercice 1846*, Imprimerie Nationale, 1848.

M'bokolo, E. "Afrique Noire Histoire et Civilisations" Tome I, 1995.

Nehemia Levtzion, *Islam in West Africa*, Variorum, 1994.

Sinou, Alain *Comptoirs et Villes Coloniales du Sénégal: Saint-Louis, Gorée, Dakar*, Karthala, 1933.

Stewart, C.C. and Stewart, E.K., *Islam and Social Order in Mauritania: A Case Study from the Nineteenth Century*, Clarendon Press, Oxford, 1973.

Schefer, C., *Instructions Générales données de 1863 à 1870 aux Gouverneurs et Ordonnateurs des Etablissements Français en Afrique Occidentale*, Tome I (1921), Tome II (1927), Société de l'histoire des colonies françaises.

Schnapper, B., La fin du régime de l'exclusif: le commerce étranger dans les possessions françaises d'Afrique Tropicale (1817-1870), *Annales Africaines*, 1959.

Zuccarelli, F., *Les maires de Saint-Louis et Gorée de 1816 à 1872*, Bulletin de l'I.F.A.N., Tome XXXVV, Série. B, No.3, 1973.